著者 大森（おおもり） 実（みのる）さん

毎日
04(H16).9.5

国際事件記者が語る戦後外交

「新聞はなぜ、イラク開戦前に戦争反対のキャンペーン記事を書かなかったのか」

国際政治の舞台裏を長年にわたり追い続けてきたジャーナリストが「新聞には戦争を止める力がある」と話す時、言葉は特別の意味を持つ。

毎日新聞外信部長だった1965年、北爆の続くハノイに西側の記者として初めて潜入した。連載「泥と炎のインドシナ」は世界に転電され、反戦運動に火をつけた。戦争終結後、米国のラスク元国務長官を訪ねると顔を見るなり怒鳴られた。「君のために、あの戦争は負けたんだ！」

ワシントンに特派員として赴任してから50年。取材した政治家、外交官の多くは亡くなった。「国際事件記者」に導かれ、読者は取材源の大半を実名で描いた戦後史の現場を追体験することになる。

例えば、鳩山政権発足直後にささやかれていた日ソ交渉について米側の意向をただす場面。ダレス国務長官はこちらの顔を「ジロリ」と見つめ「サンフランシスコ講和条約第26条をご存知か」と聞く。

後日ダレスは、共産圏に領土の譲歩を行う際に条約会議参加国の同意を求める26条を盾にエトロフ、クナシリ2島をソ連に譲歩したら、沖縄を返さないと日本を脅すのだ。

また、藤山愛一郎外相は、60年の安保改定のさい、交戦状態に入った米国に日本が共同軍事行動を取るという双務的な内容を、いかにぼかすかに苦心したと漏らした。

カリフォルニア州ラグナビーチの高台にある自宅。眼下に広がる群青色の海を見つめながら、「人生の終章を書いておく必要があると思った」と語った。99年、ウイルス性肺炎で入院。00年11月には3回も心臓麻痺を起こし、医者から臨終宣言をされた。手術で一命を取りとめたが、いまも酸素吸入器が手放せない。それでも毎日プールで泳ぎ、週1回はゴルフを楽しむ。

最近の関心事は、ジェンキンスさん問題と未発見のままのイラクの大量破壊兵器。

「10日の反戦キャンペーンで効果がなくても60日間続けてみろ」。82歳のいまも変わらぬ記者魂が伝わってきた。

文と写真・國枝すみれ

（『激動の現代史五十年――国際事件記者が挟る世界の内幕』は小学館・1800円）